

松本清張記念館

◆館報◆

2025.8
第76号

これから何かが
始まるうとして



杉本隆治は、
危険な期待に、
神経が針のようになっていた。

「地方紙を買う女」収録 『白い闇』 昭和32（1957）年 角川小説新書

現在入手しやすい本
『張込み 傑作短編集（五）』新潮文庫
『松本清張傑作短篇コレクション（上）』文春文庫

目次

松本清張研究会・第49回研究発表会……………	2
特別企画展「軍都の風景と占領の影」……………	
松本清張の戦前戦後……………	6
友の会活動報告……………	7
出前講演報告、奨励事業等……………	8

作品紹介

地方紙を買う女

バーの女給、潮田芳子は「連載中の小説『野盗伝奇』が面白そうだから」と書いた手紙と前金を甲信新聞社に送り、購読の申し込みをした。数日後、芳子のもとに作者の杉本隆治から、購読への御礼の葉書が届いた。しかし、その後、芳子は小説がつまらなくなったという理由で新聞購読をやめてしまう。

杉本には、小説がだんだん面白くなってきたという自負があり、購読を開始した理由が他にあるとらんで芳子が購読を始めた回の新聞から丹念に見ていった。すると、「臨雲映で男女の心中死体が発見された。男は東京の某デパート警備課員庄田咲次、女は同店員福田梅子と判明した。」という記事を見つけた。興味をもった杉本は探偵に調査を依頼した。報告書には庄田と芳子が情人関係にあったことが記載されていた。杉本は芳子が心中事件に関係していると疑い、芳子に揺さぶりをかける。ある時、杉本と芳子、そして杉本が懇意にしている婦人編集者の田坂ふじこの3人でピクニックに行くことになったのだが……………。

（企画係長 久富 友嗣）

松本清張研究会・第49回研究発表会

令和7年6月7日(土)

会場 東京学芸大学 参加者 40名

講演

『スサノヲ神話の成立・変容と その歴史的背景』

―『私説古風土記』の批判的継承―

講師

淑徳大学教授

森田喜久男

古代出雲に存在した

スサノヲの本源的神話

今回の研究では、『出雲国風土記』に見えるスサノヲ及び御子神に関わる神話の分析を通して、『古事記』や『日本書紀』の神話成立以前に、古代出雲に存在したスサノヲの本源的神話に迫ります。

松本清張先生は、『風土記』にも深い関心を持ち研究をされ、『私説古風土記』(平凡社、1977年)をお書きになりました。

この中で、清張先生は『出雲国風土記』の神話に登場するスサノヲに言及し、出雲地方の土地神であるとともに、大和朝廷の根幹をなす種族よりも前に列島に居住していたイヅモ系部族の共同祖的な神であったと述べています。その上で、スサノヲは後から大和に侵入してきた部族にもその名が知られていたが故に、記・紀神話において「高天原と出雲をつなぐ狂言回しの役」を担われ、高天原では「悪神」、出雲国に降りて来てからは「英雄的善神」にされたと指摘



されています。

注目すべきは、清張先生が、記・紀神話の前提となるスサノヲの本源的神話の存在を想定しておられることです。

『出雲国風土記』に見える

スサノヲ神話の検討

実は、『出雲国風土記』にはスサノヲが登場する神話は四つしかありませんが、出雲国内を巡行する姿が浮かび上がってきます。

まず、意宇郡安来郷条です。スサノヲが安来郷に来て、「私の心は安らかにになった」。これが安来の起源伝承です。

続きまして、飯石郡須佐郷条です。須佐郷に降ったスサノヲは「ここは小さいけれども、国処である」と述べて、自身の御魂を置き、大須佐田・小須佐田を定めたとあります。須佐郷は、出雲市佐田町に比定されています。この記述は小地域における本源的神話だと思われれます。

続きまして、大原郡佐世郷条です。佐世郷でスサノヲは頭に佐世の木葉を刺して踊っています。この植物を神が落とすことで、神による大地の占有権が確認されるのではないかと考えられています。つまりスサノヲが巡行しながら土地の占有を行ったことを意味します。

続きまして、大原郡御室山条です。御室山にはスサノヲが宿った室があったという。これは、神が山に忌み籠もる姿を記したもので、スサノヲは中国山地の山々に籠もる神と見なされていたことがわかります。

このように考えていきますと、出雲国内を巡行しながら、オオクニヌシによる葦原中国の国作りとは次元を異にする小規模な国作りを行うスサノヲの姿が浮かび上がってきます。記・紀では、オオクニヌシは国を作ったとか天下を経営したと書かれています。具体的なことは一切わかりません。これに対して『出雲国風土記』では、実際に神がその土地でどのような形で国作りを行ったのか、書かれています。まさに本源的神話ではないかと思えます。

『出雲国風土記』に見える

スサノヲの御子神の神話

次に、スサノヲの御子神の神話について検討します。

まず、『出雲国風土記』(以下同)意宇郡大草郷条です。この地にはスサノヲの御子であるアホハタサクサヒコがいたので「大草」と名付けられたという。「青幡」とは青々とした山、「佐久佐」には幸草の意味が込められています。

それから、島根郡山口郷条です。スサノヲの御子、ツルギヒコというのが登場します。

続きまして、島根郡方結郷条です。方結郷は、島根半島的美保関の近くです。スサノヲの御子のクニオシワケがここは「国形宜し」と言われた。だから、方結と呼ばれるようになった。このクニオシワケの「クニヲシ」には「国をヲス」、すなわち統治の意味が込められています。

続きまして、秋鹿郡惠曇郷条です。スサノヲの御子、イワサカヒコが、「国の形は描かれた鞆に似ている。私の宮はここに造ろう」と言った。だから、この地を恵伴という。このイワサカヒコは、「磐坂」ですから神と交流する磐座が連想されます。

続きまして、秋鹿郡多太郷条です。スサノヲの御子、ツキキネトヲニルヒコがここを巡行したときに、心が晴れ晴れと明るく、穢れのない正しいものとなったので、この地が多太郷と呼ばれるようになったという。

それから、神門郡八野郷条です。八野郷には、スサノヲの御子のヤノノワカヒメがいて、オオナムチが娶ろうとしたという。さらに、神門郡滑狭郷条です。滑狭郷は、スサノヲの御子、ワカセリビメがいて、この女神もオオナムチと関係を結んでいたという。

続きまして、大原郡高麻山条です。高麻山の由来は、スサノヲの御子、アホハタサクサヒコがこの山の上に麻を蒔いたのだという。麻を植える神は、同時に「野」を開発する神でもあります。

このように、『出雲国風土記』に見える御子神達もスサノヲの国作りの一端を担っています。「国作り」の中で、植林の役割をアオハタサクサヒコが分掌し、武力による制圧の役割をツルギヒコが分掌し、クニヲシワケは統治に関する権能を分掌した。すなわち、スサノヲの「国作り」は御子神達との共同作業であったというのが、『出雲国風土記』のスサノヲ神話の語るところなのです。

『出雲国風土記』に見えるスサノヲ及び御子神の神話成立の歴史的背景

スサノヲ神話成立の歴史的背景を考えるうえで注意すべきは、出雲山間部と国境を接する備後国(広島県東部)にもスサノヲ神話が語られている、という事実です。

『日本書紀』の鎌倉時代の注釈書『積日本紀』に引用された『備後国風土記』逸文をみますと、「疫隈の国つ社」に関する話として、「昔、北の海に坐しし武塔の神が、南の海なる神の女子」に求婚しに來たが、行き着く前に備後の地が暮れてしまった。そこに蘇民将来の兄弟がいた。お兄さんの蘇民将来は貧しく、弟の巨旦将来は富み榮えていた。そこで、まず弟に宿に泊めて欲しいと頼むと断られた。兄は貧しかったのにもなした。それで、武塔の神は「蘇民将来のためにお礼をしよう」と言う。武塔の神に「お前の家に誰か子孫がいるか」と訊かれたので蘇民将来は「娘が一人おります」と答えた。すると、武塔の神は「茅の輪を腰に身に着けなさい」と告げた。そしてその日のうちに、武塔の神は、蘇民将来の娘一人を除いて、皆、殺してしまったのです。武塔の神は「吾こそは速須佐雄の神である。」「後の世に疫気があれば、皆、蘇民将来の子孫と言つて、茅の輪を腰に身に着けるのだ」と娘に告げた。これが茅の輪神事の由来となる神話なのですが、ここで、スサノヲが登場する点に注意したいと思います。

この伝承から出雲西部から中国山地を越えて備後国にかけて、スサノヲを信仰する人々の姿が浮かび上がってきます。この伝承の「疫隈国社」の所在地は、広島県福山市の東深津町にある王子神社です。『延喜式』に記載された備後国深津郡にある「須佐能袁能神社」とであるとされています。

ではこれをいつの時代のことと考えるか。古墳時代前期に入ると、出雲では吉備型甕と呼ばれる土器が畿内系の甕

とともに備後地方から流入いたします。斐伊川流域から出土しており、備後から斐伊川に至るルートが重視されるようになったのではないかと考えられる。このような考古学的成果を参照しますと、出雲と備後が交流するようになるのは古墳時代前期のことなのです。蘇民将来の伝承とも重なっています。

次の問題は、斐伊川支流の赤川左岸に位置している神原神社古墳とか、その近くにある松本1号墳です。神原神社古墳は古墳時代前期の方墳で、副葬品の景初三年銘の三角縁神獸鏡は日本では出土2例のうちの1つです。松本1号墳は前方後方墳で、副葬品は獸帯鏡などが出ております。

門脇禎二先生はこれらの古墳の被葬者について「吉備から進駐してきた指揮官であろう」とされました。吉備が出雲を制圧したということですね。しかし私は出雲山間部を本拠地とし、備後と交流しながら開発を進めてきた首長と考えています。すなわち、『出雲国風土記』のスサノヲ神話が成立する前提として、こういった出雲山間部の首長による国作りがあったのではないかと思います。

しかし、古墳時代前期の段階で、出雲山間部の首長がスサノヲの御子神が登場する島根半島までを押さえていたとは考えられない。と申しますのは、島根半島にはかつて出雲国よりも小規模な狭田国が存在していた。『出雲国風土記』意宇郡国引詞章の国引神話に「狭田の国」という名前が見えます。考古学的成果によれば、「礫床」という共通の墓制を持ち、古墳時代の前期から中期にかけて大型の古墳が造営されます。長持型石棺や舟形の石棺は、日本海を通して丹後地方との交流を示唆している。このように狭田国の古墳は神原神社古墳や松本1号墳に比較して劣るものではなく、独自の地域特色を發揮しているのです。

しかし、古墳時代後期に入ると、出雲山間部の政治勢力は出雲東部や西部の政治勢力と結びつく。そういった状況下で、スサノヲの御子神による地名起源伝承が形成されていくのではないかと。このように二段階(古墳時代前期と後期)を持つて、スサノヲ及び御子神の神話は成立したと思えます。いずれにしても『出雲国風土記』のスサノヲ神話は、最終的には後期に成立していたと考えます。

スサノヲからオホナムチへ

では、本来、出雲における国作りの「主役」であったスサノヲが、どうして『出雲国風土記』において「主役」とならず、オホナムチ、すなわち出雲大社に今日祀られているオオクニヌシが「天下造らしし大神」とされたのでしょうか。

ここで留意すべきは、スサノヲが『出雲国風土記』だけではなく、『古事記』や『日本書紀』といった王権神話の中でも重要な位置をしめるという点です。スサノヲがヤマタノヲロチを退治した後に、最終的に草薙剣は天照大御神に献上されます。出雲におけるスサノヲ及び御子神の神話の形成は、古代王権との関わりを視野に入れて考える必要があると思えます。さて、ヤマ



タノヲロチ退治神話の中に物部氏と関わりを持つものが存在します。『日本書紀』の神代第八段一書第二によると、素戔嗚尊が安芸国の可愛の川上に降ります。そこでヲロチ退治をして、稲田媛を出雲国の簸の川上に遷したと書かれています。さて、ヲロチの尾から出た草薙剣は尾張にありますが、一方、ヲロチを斬った剣については、「此は今石上に在らず」と『日本書紀』に書かれています。つまりヲロチを斬った剣は石上にあるということです。ここで想起しなくてはならないのは、石上神宮が物部氏に深く関わる神社だということです。

物部氏と出雲との関係ですが、『日本書紀』崇神六十年七月己酉条を見ますと、物部氏の同族の矢田部造の遠祖武諸隅が出雲に遣わされ、出雲大神の宮にある神宝が天皇に献上されます。また、『日本書紀』垂仁二十六年八月庚辰条をみると、出雲の神宝を物部氏に掌らせたことが分かります。物部氏が出雲に影響力を持っていたことは疑えず、スサノヲ及び御子神の信仰が出雲全域に広がった際に物部氏が果たした役割を想定せざるを得ません。

しかし、出雲に影響力を及ぼした勢力として、蘇我氏の存在も忘れるわけにはいきません。裝飾大刀の柄は、出雲の東部では双龍環頭大刀です。これは船載系で蘇我氏と結びつく。一方、西部の太刀は円筒です。これは倭風で物部氏

と関係している。最終的には用明天皇没後に起きた蘇我物部戦争で蘇我氏が勝利したため、出雲東部の勢力が出雲全体を統一し、出雲国造に就任したという考え方が、地元の研究者の間では一般的となっていました。このような点を踏まえると、当初、出雲全域に広がっていたスサノヲ及び御子神の神話にかぶさる形で、新たに「出雲国造によって、オホナムチを頂点とする「天下造らしし大神」の神話が成立していくのではないか。

「出雲大神の宮」の神宝の検校を物部氏の同族が行ったことは先に述べました。この「出雲大神の宮」は杵築大社を指すと考えてよいでしょう。すると、杵築大社の祭神は、最初、スサノヲで、後にオホナムチへと転じた可能性がある。「日本書紀」によれば、斉明朝に入って、出雲国造により「神の宮」の修造がなされます。その際に、杵築大社の祭神がスサノヲからオホナムチへと変わったのではないかと考えられます。この祭神の変化の背景には対外関係の緊張があり、「治天下大王」(天下を治める大王)に対応する形で『出雲国風土記』に見える「所造天下大神」(天下を造った大神)が作られたのではないかと考えます。

研究発表

『松本清張と能楽』

―芸能者へのまなざしをめくって―

発表者

国士舘大学専任講師 倉持 長子

能楽と清張作品

『柳生一族』(昭和30年)

柳生宗矩の能好きは歴史的にも有名です。柳生宗頼(宗矩の前の名前)は利勝に凭った。利勝は猿楽を好む。宗頼もはなはだ好んだ。はじめはそうい

う因縁からであった。宗矩は土井のほか、酒井忠世や堀田正盛の屋敷に出入りし、猿楽を観たり、物事を斡旋したりして、しだいに政治的手腕を伸ばしていった。このように、大名や武士の間で猿楽が繋がり役目を果たしている場面が出てきます。

『戦国権謀』(昭和28年)

「大久保」忠隣の改易の因は、彼の苗字子であった大久保長安の不始末もあって、家康の心証を損ねていたにもよる。長安はもと大藏藤十郎といつて一介の能役者であった」とあり、「この藤十郎に大久保姓を名乗らせたのは家康で、「しかるに長安に私曲があり、彼の死後、家康はこれを追討した」と書かれています。二年後の『山師』で、正面から大久保長安、大藏藤十郎のことを描いていきます。

『山師』(昭和30年)

清張さんはこの『山師』について、「私の歴史小説としては最初の気に入ったもの」と書いています。家康が天正十八年に京都から四座の猿楽をよんで興行した。役者共はかなり長期に留め置かれ、替る替る夜詰めに罷り上った、などと具体的に猿楽役者の役目が書かれています。この末座に座っていた猿楽役者の大藏藤十郎が家康に近づいて行くのです。「家業の猿楽師を廃めて金を掘る奉行にならぬか」と家康が誘うと、藤十郎は「何分にも畏み奉り候」と答える。「顔は一時に血の色がさし、返事には弾んだ息が單っていた」。ねらっていた金堀奉行(山師)になることで大きく出世していくという話です。

猿楽興業の奉行が大藏藤十郎を家康に取り次ぐ場面、家康は「猿楽役者がのう」と目を天井に向けながら言う。家康は猿楽を愛し楽しんでいるが、どこか猿楽に対する冷やかな眼差しを持つ人物として描かれています。大藏藤十郎の生い立ちなども、清張さんはしっかりと研究して書いている。大藏大夫という猿楽師の子で武田藩に仕えていたこと、猿楽師として活躍していたこと、もともと金春が出身であることも書かれています。

『破談変異』(昭和31年)

この作品では能のモチーフを小説の主題に大きく取り込んでいる。その中で「八嶋」という能が引用されます。「江戸城中、二の丸殿にしつらえた舞台では、京より四座

の能役者を呼びくだして、舞わせていた。寛永五年の春のことである。曲は家光の好きな「八嶋」であった。家光は正面の座から身体を前にのりだすようにして観ていた」『山師』に出てきた、家康の天正十八年の能の舞台に続くものとして位置付けられています。一番に「八嶋」を持ってきたのが印象的です。

「景清追いかけて三保の谷が、着たる甲の鍔をつかんで、うしろへ引けば三保の谷も、身のがれんと前へゆく、互いにえいやと、引くちからに、鉢付けの板より、引きちぎって―」という悪七兵衛景清の鍔引きの段も引用されています。

『破談変異』の主題は武士の名分です。そこで、能の「八嶋」を持つてくるのが非常にうまく思います。今引用した鍔引きのほかに、義経の有名な弓流しというお話があります。義経が海に流した自分の弱い弓を敵に取られまいとして、危険を顧みずに取り返すという、まさに武士の名分を語る場面です。そのように、能の「八嶋」のテーマと『破談変異』のテーマとが通じ合っている。とても印象的な能の取り入れ方です。

『足袋』(昭和53年)

昭和の女性師範がテーマと大きく取り入れられています。津田京子は某流の謡曲の女性師匠で、大師匠の水野孝輔に公私にわたり面倒を見もらっている。ところが、京子は自分の弟子の商社マンである村井英夫と逢瀬を重ねるようになる。しだいに狂乱して、最終的には左側の白い足袋を村井の家のポストに入れて、右の足袋はつけたまま玉川上水で溺死するお話です。

昭和61年にドラマ化されています。ドラマでは、能の「鉄輪」という三角関係を描いた作品と重ねた設定になっています。岩下志麻さんが主演でした。

『足袋』の背景には、昭和期において謡曲とか仕舞の稽古の人口が増加したということがあります。そのため、女性師範も必要になってきたのです。

『世阿弥』(昭和32年)

『世阿弥』は、『芸術新潮』2月号に「日本芸譚(二)世阿弥 松本清張」として所載されました。『小説日本芸譚』後記を見ますと、「芸術家は存在しても、人間の所在が分らない」とあります。芸術家の人間としての姿が見えてこないという困惑を、「当人が芸術



に被光されて、見えなくなっている「芸術が人間の上にはレーションを起こしている」と正直に書かれており、本当に知りたいのは人間なのだと明かされています。

先行研究と『世阿弥』批判

先行研究として、小野寺凡氏の「松本清張 世阿弥」や森本穂氏の「世阿弥」評がありますが、能楽研究者のものとして増田正造氏の研究があります。仙洞御所への出入り禁止に対する世阿弥の描写「抵抗出来ぬ破滅は、時に壮快なもの」は、清張らしい渾身の見事さだと一定の評価をされています。一方で、清張の能の理解に対しては批判をされている。「世阿弥」の中の「神楽の余興から成長した猿楽」とか「田舎猿楽であるから、略して田楽といった」という記述は少しく乱暴にすぎると批判しています。

世阿弥の伝書『風姿花伝』は七つのパートに分かれています。最後が「別紙口伝」です。清張さんはその「別紙口伝」について世阿弥が五十六歳の時に、老境に入って書いたと理解しているのですが、それはちょっと困るとも批判しています。「年寄りの心には、何事も若くしたがるものなり」の一文を取り上げ、清張さんは「年寄りの羨望と嫉みという一般の演技論のこの主題が、思いがけない毒液の飛沫を彼に浴びせた仕儀になった」として、「芸の花を求めて若い年代と格闘する世阿弥の老境を描き出そうとされたわけです。しかし、実際に世阿弥が「別紙口伝」を書いたのは四十歳ごろ、応永十年、1403年頃に成立しているのです。世阿弥の自筆本『花伝第七別紙』が残っています。

しかしこれには仕方ない面があります。というのは、世阿弥の能楽論研究が本格的となるのは、実は昭和36年、『歌論集・能楽論集』という岩波の『日本古典文学大系』の本文が出てからなのです。特に花伝の伝本研究が一定の完成を見誰もが読めるようになるのは、「世阿弥 禅竹（1974年）」という表章氏・加藤周一氏による研究書からです。清張さんは『風姿花伝』や『申楽談儀』といった能楽伝書をこれでもかというくらい読み込み、作品の中に詰め込んでいます。清張さんは、昭和15年の能勢朝次先生の『世阿弥十六部集評釈』と、昭和18年の川瀬一馬博士の『世阿弥自筆伝書集』などは読んでいたのですが、『世阿弥』を書かれた昭和30年代前半には、まだ『風姿花伝』の成立は明らかにされて

なかったのです。そういう意味では、清張さんが老境に面した世阿弥によって「第七別紙口伝」が書かれたと捉えられたのは、全く自然のことだと思えます。

『世阿弥』執筆と能楽研究

清張さんは『世阿弥』の中に世阿弥の伝書だけでなく、世阿弥の娘婿である金春禅竹が書いた『歌舞髓脳記』という伝書を引用しています。これは清張さんのプラスの点だと思えます。具体的にいうと、足利義満が一流の鑑賞眼を持っていたことを示す上で、「花をかざし玉をみがく風流に至りては、鹿苑院殿（義満）の御代より殊に盛りにして、和州江州の芸人、あまねく御覧じ別ち、強俗を斥け、幽玄をば請じ（強い俗性を退けて幽玄の能を求め）、諸家の名匠善悪の御批判、分明仰せ出されしより、道の筋目品々位位を弁え、芸道に於ては更に私なきものなり（猿楽の芸道の筋目、品位が上がってきて、芸道においては勝手な振る舞い）ができなくなった」と『歌舞髓脳記』を引用しています。金春禅竹の伝書研究が読めるようになるのは昭和7年の野々村戒三氏の『金春十七部集』からです。そして、昭和44年に出版された表章・伊藤正義氏校注の『金春古伝書集成』によって、初めて校定された形で禅竹の『歌舞髓脳記』が読めるようになったのです。正しい形で禅竹伝書を読むことの難しい昭和30年代に、清張さんは『歌舞髓脳記』を自らの目で跋文まで読み込んで引用している。これは本当にすごいことだと思えます。

批判された清張さんの能楽理解のうち「神楽の余興から成長した猿楽」ということについては、当時の研究の第一人者である桑田忠親氏の『世阿弥と利休―能楽と茶道―』（昭和31年、1956年）からの理解と考えられます。最新の研究を踏まえているわけです。桑田氏の論文の中では、朝廷の神嘗祭や伊勢神宮の大祭の神楽の後で余興として猿楽は始まったと書かれています。「小説日本芸譚『後記』で、清張さんは「なるべく誤りのない見方をするように努めた。（中略）読書の外には、出来るだけ専門学者を訪ねて意見をきいた」とあり、その中に、桑田忠親、久野健、谷信一といった当代きつての学者の名前が述べられています。「田楽は田舎猿楽であるから田楽」という理解も、実は桑田忠親氏のご論の中にある。

また当時の能楽研究を『世阿弥』の表現の中に取り入れています。野上豊一郎さんの『世阿弥元清』という論文の中では、「世阿弥は観阿弥に較べて遙かに恵まれた境遇から出発した」その地位を利用して芸道に精進することができた」と書かれています。清張さんの『世阿弥』の「世阿弥は初めから仕合せな身分のなかで成長した。彼は少年時代から義満の傍にあった」彼らの喝采をきき、匂うような貴族の空気を吸って舞って来た」という表現は、野上豊一郎先生のご論に影響を受けていると思われまます。

『世阿弥』の中では、己自身の消失を恐れ、元雅への相伝を惜しむ、「拒否の自我」を持つ世阿弥像が描かれています。彼自身が主役で、彼の作劇は他人のためでなく、その中で絶えず己が動いていなければならない、という記述があります。これも野上豊一郎氏の「世阿弥は自分のために、もしくは自分の時代のために能を作ったのであった」いつの時代ともわからぬ子孫後世のために作ったのであった」という、「自分のため」という表現をうまく活かしているのではないかと思います。

松本清張『世阿弥』の位置づけ

松本清張以前にも世阿弥を扱った時代小説は出ています。瀧川駿氏の『世阿彌』（1955年）は、かなりフィクションな設定の小説です。山崎正和氏の戯曲『世阿弥』は岸田國士賞をとり、海外でも公演され大変評判の高いものです。

一方、清張さんの『世阿弥』は世阿弥という人間に、あくまで生の世阿弥の『風姿花伝』や禅竹の『申楽談儀』から迫ろうとする態度が非常に強く見られ、かなり緻密にその伝書を引用しているのです。さらには、執筆時点における野上豊一郎氏や桑田忠親氏という一流の学者の最新研究を取り込み、フィクションな部分はかなり抑えている。清張さんの『世阿弥』は世阿弥本人の言葉と口吻、そして当時最新の研究状況から推理できる範囲で、社会権力とそれに翻弄され抵抗する人間の関係と、心境・業・芸の琢磨と伝承における人間の肉面的真実を見極めようとしていると考えられます。

軍都の風景と 占領の影

松本清張の戦前・戦後

令和7年 9月20日(土) - 11月24日(月・休)

9月21日は国際平和デーです

松本清張の乳児期の写真は、広島市の写真館で撮影されています。生誕後、家族で移り住んだ小倉市で出生届が出された清張は、広島と小倉2つの軍都で生まれ育ったといえるでしょう。軍都は、軍人や軍属とその家族が集まる都市で、商都でもありました。清張を軸に、文学者と軍都の意外な接点を発見します。

また、日常を奪われた者の哀しみや、戦争を厳しい眼で描いた清張作品を紹介します。平時にも戦争の影が射していること、戦時下だけが戦争ではないことを、これらの作品は教えてくれます。

清張からの問いかけに、私たちの日常という平和を、いまいちど確かめなおしてみませんか。

HIROSHIMA



KOKURA※

日常という平和に潜む
ブラックボックス—

※陸軍小倉造兵廠で製造された風船爆弾の「気密度検査(漏球テスト)」をする様子。林えいたい氏旧蔵ありらら文庫資料室所蔵登戸研究所資料館提供



I. 松本清張とふたつの軍都

清張と関わりの深い土地である広島と小倉を中心に、時に入れ違い、時に重なり合う文学者の足跡にフォーカスします。

広島

- ◆ 文学者と兵隊のまち
—— 原民喜、中原中也、松本清張
- ◆ 被爆のまち広島を歩く清張



松本清張
生後2ヶ月

小倉

- ◆ 文学者と兵隊のまち
—— 森鷗外、
松本清張、
やなせたかし
- ◆ 小倉あるいは
北九州の戦跡



小倉工廠 砲弾工場
(今村元市編「写真集 明治大正昭和 小倉」図書刊行会)



やなせたかし
『アンパンマンの遺書』
(2013年 岩波書店)



松本清張と小穴勝弘
(上條千里氏所蔵)

II. 占領下の「キャンプ・ジウノ」

「黒地の絵」の舞台となった「キャンプ・ジウノ」の映像を放映。「黒地の絵」直筆原稿も公開します。

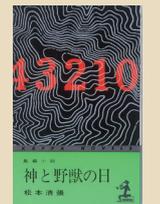
1952. CAMP JYONO

「黒地の絵」の舞台であるキャンプ・ジウノが撮影されている映像を上映します。

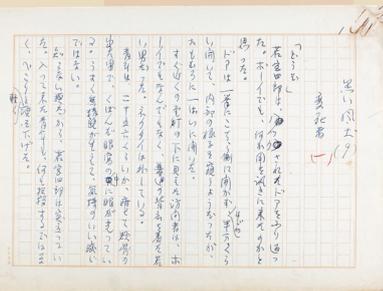
(映像出典:米国立公文書館)



『黒地の絵』
(1958年 光文社)



『神と野獣の日』
(1963年 光文社)



「黒い風土」原稿(のち「黄色い風土」に改題)

新情報

- ◆ 衛生兵・清張と、軍医・小穴勝弘
松本清張が衛生兵だった時の上官(軍医)・小穴勝弘は、戦後、作家となった清張とも交流が続いていました。

明治大学平和教育登戸研究所資料館 協力展示
「小説帝銀事件」「日本の黒い霧」「黄色い風土」などで清張はいち早く「登戸研究所」の存在に触れていました。

III. 平和を問う清張作品

戦争を直接的に描いた清張作品は、それほど多くはありません。しかし、戦争によって家族との日常を失った者の哀しみと憤りや、戦後も続く旧軍人の謀略などを、厳しい眼で描いた名作があります。

勝山公園周辺の
戦後80年
特別企画

北九州市立中央図書館

戦後80年企画展示
7月2日(水) - 10月13日(月・祝)

北九州市平和のまちミュージアム

企画展
「記憶の表象—継承とは何か、を問う—」
7月23日(水) - 10月13日(月・祝)

北九州市立文学館

企画展
「ペンと戦争—火野葦平、林芙美子の場合—」
7月19日(土) - 9月28日(日)

スタンプラリーのお知らせ

4館の特別企画展期間中の9月20日 から10月13日まで(文学館は、文学館の特別企画展終了後も10月13日まで)、4館中3館に入館し専用スタンプを押印した方へオリジナルグッズを提供します(限定1,000人)。

三人の作家の文章修業(2)

松本清張友の会
会長 加島 巧



池波正太郎(1923 - 1990)と平岩弓枝(1932 - 2023)の共通点は何であろうか。二人共長谷川伸の主催する新鷹会で腕を磨いた。大正12年の関東大震災の年に生まれた池波正太郎は小学校を卒業すると社会に出た。十二歳のことだ。戦争から戻ると、都の職員となり、読売新聞社の演劇文化賞に戯曲で応募し、入選したことで、長谷川伸に師事する機会を得た。

しばらくは新国劇専門に戯曲を書くのだが、小説を書き始めたのも長谷川伸のすすめだ。1960年(昭和35)に「錯乱」で第43回直木賞を受賞する。「鬼平犯科帳」、「剣客商売」、「仕掛人・藤枝梅安」に加え、「旅」、「映画」、「グルメ」などのエッセイでファンを引きつける。池波の作品を読むと、すらすらと筆を進めて書いているような印象を受けるが、或るとき、筆が進まずに行き詰まる。ふつうは、一日か二日で壁を突き破れるそうだが、この時は五日も六日も先に進まなかった。池波はどうしたのか?『日曜日の万年筆』(新潮文庫)に書いてあった。

ふと、猫のネネに眼が行った。「おい、ネネ。何を考えている?」と声をかけると、ちらっと見たネネは、その顔をそむけた。その瞬間に「ひらめいた!」そうだ。十五枚ほど書き進めた所で猫が出てくる連載小説、おそらく『剣客商売二十番斬り』(新潮文庫)に収録されている「白い猫」であろう。ネネはご褒美に車海老をもらった。

平岩弓枝は代々木八幡宮の宮司の一人娘だ。誕生の時には男の子用に、悠紀磨という名前も用意されていた。日本女子大学国文学科を卒業し、縁があり、戸川幸雄の指導を受けるようになる。第一作「女の法案」は九回の書き直しの後に完成した。その一回一回に細かな指導が入った。平岩は書き直しをしながらもう一作、別な作品を仕上げた。それを戸川は『大衆文芸』の編集長に渡す。長谷川伸と繋がった瞬間である。『大衆文芸』は新鷹会の同人雑誌だったのだ。『鑿師』で第41回直木賞を受賞する。平岩弓枝にとっては四作目の小説だ。刀劍鑑定士を扱った話で、硬い文体が印象的だ。文春文庫版には、

長谷川伸の序文と直木賞選考委員会当日の三時間の様子が書いてあり、受賞作の文体の硬さを和らげてくれる。その後、テレビドラマの脚本の仕事が舞いこむ。NHKの連続テレビ小説『旅路』やTBSテレビの『ありがとう』、『肝っ玉かあさん』などを書いた。それがその後小説の世界に戻った時に役に立ったことは言うまでもない。1973年(昭和48)から書き始めた『御宿かわせみ』は人気シリーズとなる。幕末末期に二十二歳で登場した「るい」は「東吾」と結婚し、旅籠「かわせみ」は明治という時代を迎えた。文春文庫版で34巻の教養小説となった。

小学生の時に愛犬「トミ」の思い出を書いた作文が小学校のパンフレットに載ったことで、平岩の両親は娘に文才があるのではないかと思ったそうだが、この「トミ」という犬は、平岩が小一の時、仮病で早退し、家にすぐ帰らずに公園で時間つぶしをした時も付き合ってくれた。「私の履歴書」(日本経済新聞社)にはその時のことがおもしろく書かれている。その後に真相を知った母親は「犬までがぐるになって」と立腹したそう。

松本清張(1909 - 1992)と関係の深い劇団は、「前進座」だ。中村翫右衛門の『劇団五十年 わたしの前進座史』(未来社)や中村梅之助の『前進座八十年』(朝日新聞出版)を紐解くと、松本清張の名前が出てくる、出てくる。前進座が初めて取り組んだ清張作品は「いびき」だ。1961年(昭和36)12月のことだ。翌年には「左の腕」が上演され、清張作品は前進座の持ちネタの一つとなった。「左の腕」は松本清張が留置所に十日ほど入れられた時の経験が反映されている。清張生誕百年の年の2009年(平成21)にも演じられ、2021年(令和3)に仲代達矢が役者生活七十周年記念公演を「無名塾」と行った時には、「左の腕」で全国を廻った。

松本清張は作品を前進座に提供するだけでなく、1968年(昭和43)に発足した若手を育てる「矢の会」の発起人にも名を連ねている。松本清張の戯曲に関する理解度のすごさは、「形影 菊池寛と佐佐木茂索」(『松本清張全集64』)を読むと分ると井上ひさしは言っている。(『松本清張研究第二号』・『松本清張生誕一〇〇年記念巡回展図録』)

松本清張は「赤猫」(『松本清張全集24』)を書いた。「赤猫」とは火事や放火の隠語である。一方「愛犬」(『隠花の飾り』(新潮文庫所収))と「指」(『水の肌』(新潮文庫所収))では「犬」が重要な役割を演じる。

友の会 会員更新と新規会員募集のお知らせ

松本清張記念館友の会は、8月1日から翌7月31日までを1年間として、多彩な事業を実施しております。

年会費は3,000円です。皆様のご入会をお待ちしております。



友の会入会のお申込は、
TEL.093-582-2761
松本清張記念館友の会事務局まで

第28回

松本清張研究奨励事業募集

募集要項

対象

- ①松本清張の作品や人物を研究する活動
- ②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)

※上記①②の活動で、こちら行おうとするもの。ジャンルは問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体も可。

内容

入選者(団体)に100万円を上限とする研究奨励金を支給します。

応募方法

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(全て様式は自由。ただし日本語)を令和8年3月31日までに応募してください。

詳しくは、ホームページをご覧になるか、記念館までお問合せください。



ミニ企画展

松本清張と芥川龍之介



青年期、松本清張は芥川龍之介の作品を愛読し、影響を受けたことを『半生の記』などに書いています。それらの文章から、清張の芥川への眼差しを紹介。また清張が実際に手に取り、読んだとされる小野家所蔵の芥川全集も展示しています。

朗読・ミュージック・おしゃべりサロン

毎月1回、古賀館長と地域の音楽家や朗読家など有志があつまり、企画展示室やSEICHOカフェにて開催しています。松本清張作品に関連づけた楽曲の演奏や歌唱、清張作品の朗読などに多くの方が参加されました。



地域作品コーナーを設置しました。

(令和7年8月29日～)

北九州地域を舞台とした清張作品を紹介するコーナーを常設展示室内に開設しました。

清張作品を文章でたどり、作品の背景やそれらの舞台がどのような変化を遂げているかを紹介しています。

第27回 松本清張研究奨励事業 入選企画決定

入選者

松本清張ミステリーにおける女性探偵の人物造形 肖瀟 (名古屋大学人文学研究科博士後期課程2年)

松本清張の作品世界における「無宿人」の眼差し —「疎外された層」の表象をめぐる比較文学的考察 中垣 恒太郎 (専修大学文学部教授)

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813 北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761 FAX 093(562)2303
<https://www.seicho-mm.jp>
制作 (株)ハーティブレン



イラスト: 山藤 章二

- ❖ 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- ❖ 休館日 毎週月曜日(休日の場合は翌日)、年末年始(12/29～1/3)、館内整理日
- ❖ 観覧料 一般/600円(480円)、中高生/360円(280円)、小学生/240円(190円) ※()は30人以上の団体
- ❖ アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただくも便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州都市高速 大手町ランプより5分

講演会に行ってきました

日付	主催者・会場等
2/17	八幡西区黒崎市民センター (八幡西区小地区公民館第1ブロック研修会)
2/22	若松中央市民センター(一人暮らし年長者ふれあい交歓会)
3/2	丸善リバーウォーク北九州店(丸善とのコラボイベント)
4/26	松本清張記念館(北九州市立大学留学生)
5/12	北九州市立周防学舎(ふるさとの文化コース)
5/16	北九州市立こども図書館(ビジネス支援講演会でのクロストーク)
5/24	小倉リーセントホテル(北九州総合デザイナー協会)
6/3	北九州市立周防学舎(生活情報コース)
6/13	若松区石峯公民館(石峯サロン)
6/17	北九州市商工会議所(北九州市商工会議所 正・副会頭会議)
6/20	松本清張記念館(九州ブロック教職員互助会)
6/21	旧門司税関(朝日新聞西部本社発刊90周年記念講演会)
6/26	北九州市東京事務所(東京での出張講演)
7/24	アートホテル小倉ニュータガワ (九州ブロック民生委員・児童委員関係事業会議情報交換会)
7/25	門司区藤松市民センター(市民センター講座)
8/6	八幡西区赤坂市民センター(生涯学習講座)

北九州市東京事務所で講演をしました

令和7年6月26日(木)、東京都有楽町「東京交通会館」内の北九州市東京事務所で古賀館長が講演を行いました。東京での講演は初めてとなります。清張の人となりや作品を説明し、最後にオカリナを演奏しました。オカリナ独特の柔らかい音色に、参加した皆様は神妙に聞き入っておられました。



● 編集後記 ●

例年8月に開館記念講演会を実施しておりましたが、今年度は2月22日にミステリー作家の方々をお招きしてトークショーを開催することになりました。ぜひ北九州市に足をお運びください。

また、9月20日から特別企画展「軍都の風景と占領の影 松本清張の戦前・戦後」を開催しております。皆様のご来館を心よりお待ちしております。(Y.K)



※当館専用駐車場はございません。隣接する市営駐車場をご利用ください。